【日本の大学】第 25 回――お茶の水女子大学：女子学校教育の草分け

日本最初の女性のための官立高等教育機関として、1 世紀半近く前の 1875 年に開校した東京女子師範学校が、お茶の水女子大学の前身である。女子の学校教育を普及させるために女性教員を養成することを主目的に開学された。以降、数多くの優れた女性教育者、研究者を輩出したほか、多岐にわたる分野で多くの卒業生が活躍している。

正門

多彩な人材を輩出

開学以降、東京師範学校女子部、高等師範学校女子部、女子高等師範学校と名称が変わった後、1908 年に、奈良女子高等師範学校が設置されたことに伴い、東京女子高等師範学校となった。それまでの 30 年余は、日本でただ一つの官立の女子高等教育機関であった。このため、教職を希望する以外に、学問の研究や他分野の専門職を志す女子学生も入学しており、日本の女医第 1 号が卒業生から誕生するなど、多彩な人材がこの学窓から巣立っている。

以下、お茶の水女子大学のホームページなどから大学の歴史、現状をみていこう。

第 2 次大戦後、この流れを引き継いで 1949 年に新制大学としてお茶の水女子大学が誕生した。当初は文学部と理家政学部の 2 学部が作られ、それまでの東京女子高等師範学校はお茶の水女子大学に包括された。

名前の由来は、戦前の師範学校設立当初から校舎が、国鉄（現在は JR）御茶の水駅の近くにあり、長く“御茶の水”の通称で親しまれたためである。関東大震災（1923 年）によって校舎が焼失し、その後、1930 年代にかけて本校や付属施設などが、現在地である大塚（文京区大塚 1 丁目）に順次移転したにもかかわらず、戦後、名前を付ける時に愛されてきた「お茶の水」を冠したのである。

1950 年には、文教育学部、理学部、家政学部の 3 学部となった。52 年には、東京女子高等師範学校が廃止となり、附属高等学校、中学校、小学校、幼稚園は文教育学部の付属となった。その後、各学部に新たな専攻科や学科を設置したり、大学院を設置したりするなど教育内容の充実・拡充が図られていった。

大学本館

生活科学部を新設

1992 年には家政学部（被服学科、食物学科、児童学科、家庭経営学科）を廃止するとと

もに、生活科学部（生活環境学科、人間生活学科）を設置した。この結果、学部は文教育学部、理学部、生活科学部の 3 学部となり、現在もこの体制が続いている。

1996 年には文教育学部の中身を改編し、従来の哲学科、史学科、地理学科、国文学科、外国文学科、教育学科、舞踊教育学科の 7 学科を、「人文科学科」「言語文化学科」「人間社会学科」「芸術・表現行動学科」の 4 学科へと改めている。

文教育学部は、人間を取り巻くマクロな社会や環境からミクロな個々人の思想や発達、言語、そして文学、美術、音楽・舞踊といった芸術まで、多彩な研究分野があり、それらは「生きている」人間とその文化や社会への関心が核となっている。4 学科に、専門教育のプログラムを提供する 13 のコース・環が置かれ、学生の関心に沿って広く学修できるように、自由度の高いカリキュラムを組んでいる。

また、同学部では、「グローバル化」に焦点を当てて、各学科の枠を超えて「地域研究・地域文化」「多文化交流・多文化共生」「国際関係・国際協力」といった領域を専門的に学ぶ「グローバル文化学環」に進むコースも用意されている。

理学部は、国立の女子大学としては数が少ない特色のある存在である。女高師以来の伝統の下で、講義、実習、演習では少人数制での教育を実施。学科の中には、大学院への進学率が 80%を超える学科も出てきている。学科は、「数学科」「物理学科」「化学科」「生物学科」「情報科学科」の 5 学科である。

生活科学部は、科学技術の進展、情報化社会、国際化、高齢化など急激に変化しつつある時代の要請に応えて、健康で快適、豊かな生活の実現のために模索を続けている。少人数教育の特色を生かして、実験・実習やブレーンストーミング、卒論指導など、ユニークで密度の濃い教育を行っている。学科は、「食物栄養学科」「人間・環境科学科」「人間生活学科」「心理学科（2018 年度設置）」の四つ、人間生活学科の中に、生活社会科学講座、生活文化講座などの講座を設けている。

大学院は、「人間文化創成科学研究科」があり、その中では、修士、博士課程ともに「比較社会文化学専攻」「人間発達科学専攻」「ジェンダー社会科学専攻（博士課程はジェンダー学際研究専攻）」「ライフサイエンス専攻」「理学専攻」「生活工学共同専攻（2016 年開設）」の 6 専攻が設けられており、さらにそれぞれの選考が細分化されて研究活動を行っている。

キャンパス内

真摯な夢、実現の場

大学は、2004 年に国立大学の法人化に伴って「国立大学法人お茶の水女子大学」となったが、その際、「学ぶ意欲のあるすべての女性にとって、真摯な夢の実現の場として存在する」との標語を掲げた。

この標語のもとで、「常に時代の変化に敏感でありつつも普遍的な真理を追究し、そのことによって、女性も男性も自由かつ対等に活躍できる多様で豊かな人間社会を実現するという歴史的使命を果たしていくことを目指してここに大学憲章を定める。」としている。

大学憲章では、校歌にある

みがかずば　玉もかがみも　なにかせん
学びの道も　かくこそありけれ

をひいて、人はみな、磨かれざる原石として生まれ出るのであり、学びの道を志す人には、いずこに在ろうとも、自らの信ずるものを自らの努力によって怠りなく磨き続け

ることが求められる、として、「教育文化」「研究文化」「国際交流」「社会との交流」などに関する中長期的な活動指針を定めている。

また、少人数制による高度な専門教育を施す中で、グローバル化する現代社会の要請に応じて領域横断的な視野、変化に対応する判断力を養う「21 世紀型文理融合リベラルアーツ」を推進している。これは、2008 年度から導入したもので、人文、社会、自然の三つの系列の科学を、教員が連携しながら組織を構成し、文系・理系にまたがる五つのテーマ（生命と環境、色・音・香、生活世界の安全保障、ことばと世界、ジェンダー）に沿って、講義、討論、発表、演習・実験・実習を組み合わせた系列科目群をつくり、多面的に学んでいく。

さらに、2011 年度からは、「複数プログラム選択履修制度」をスタートさせている。これは、リベラルアーツ教育を基礎とする専門教育課程の中で、「主プログラム」「強化プログラム」「副プログラム」「学際プログラム」の 4 種類から構成され、各プログラムを自由に結びつけることで、自分のニーズに即応した知識・技能を体系的に深く学ぶことが可能になるとしている。

社会との連携や社会への貢献としては、優秀で有能な女性の育成、社会をリードする女性を養成することが、大学設立の目的であり、こうした人材を社会に送り出すことによって、高齢社会になりつつある日本の社会に貢献することを目的の第 1 に挙げている。ほかに、産業界、政府・地方自治体など学外組織との連携協力、地域社会や国際社会への連携を図ることも強調している。

初等教育からの一貫教育を長く実施してきたことも、同大学の特色である。保育園、幼稚園、小学校、中学校、高校が同じキャンパス内にあり、その多くが、東京女子師範学校が設立されて間もなく、創設された日本で最初の女子の初等、中等教育機関である。

女子大学だけに、女性の社会進出やジェンダー問題には強い関心を持っている。2004 年の国立大学法人化の際には、全国に先駆けて「女性支援室」を設置して、男女共同参画への取り組みを始めている。2006 年度から 09 年度には、文部科学省特別教育研究経費による「女性リーダー育成プログラム」や 08 年までは、女性研究者支援事業である「女性研究者に適合した雇用環境モデルの構築」にも採択され、この分野の研究を進めてきた。11 年には「男女共同参画推進本部」も設置している。

現在の学生数は、学部が 2053 名、大学院が 872 名（いずれも外国人留学生を含む）、教職員数は 481 名となっている。（2018 年 8 月現在）　また、大学（幼稚園、小中高を含

む)で働く人のうち、女性の占める割合は 56.5%、うち大学、センターなど教育職員、研究職員の割合は 52.3%、附属学校園・保育所教職員は 68.5%、事務職員、技術職員は 53.6%、管理職に占める割合は 37.5%、役員に占める女性の割合は 42.8%(2020 年 6 月現在)となっている。

卒業式

学長は、2015 年から室伏きみ子氏（理学部生物学科卒、理学修士課程、医学博士課程修了、大学院教授、理学部長、理事・副学長などを経て現職、専門は細胞生物学、生化学、科学教育）が務めているが、2021 年 3 月末で任期が満了し、4 月からは佐々木泰子氏が就任する。佐々木氏は文教育学部文学科国文学国語学を卒業、大学院では日本文学専攻、日本言語文化専攻を修了、教授などを経て現在、理事・副学長。専門は言語・文化コミュニケーション論。

日文：滝川　進

写真：お茶の水女子大学 FaceBook から